2020年1月

明けましておめでとうございます！本年もどうぞよろしくお願いいたします。令和初めてのお正月を迎え、この一年も平和で素敵な年になることを願いたいと思います。

さて、今回ご紹介したい本は**『動物の赤ちゃんは、なぜかわいい』 増井光子著 創美社 2008**です。この本は、『動物の赤ちゃんはなぜかわいい』というタイトルですが動物の赤ちゃんのことだけでなく、子育て・動物たちの社会とルール・何を考えているのか・晩年などさまざまな視点から動物について書かれています。

私が一番印象に残っているのは、やはり表紙にもなっているマレーバクの親子の写真について取り上げられた内容です。子どもの頃と大人になってから毛色が異なる動物で、イノシシの子のウリ坊のような縦縞模様はマレーバクにもみられます。なぜ、子どもの頃はこのような模様があるのかというと、藪に潜んでいると、木漏れ日の斑点にも似ていて、敵に見つかりにくいからなんだそうです。鹿の子の白い斑点も同じだそうです。ただ見た目がかわいいからではなく、敵に対して反撃しにくい子どもにとって毛色がいかに大切なのかがわかりました。

もう一つご紹介したい内容があります。それは、私たち人間も考えなくてはならないこと。なんと、**温度で性別が変わってしまう動物がいる**ことをご存じでしょうか？“カメ”や“ワニ”の仲間の卵は地熱でふ化しますが、その時の温度によって子どもの性別が決まるのだそうです。例えば、アカウミガメの場合、30度で性比1対1・32度で雌・28度で雄・さらに低温になると雌が多くなるといわれています。また、アメリカアリゲーターは、34度以上ですべて雄・30度以下で雌になるんだそうです。地球温暖化は、動物の雌雄の性比まで偏らせてしまう恐れがあることに気付かされます。温暖化が止まらない限り、上記の一部の動物がいなくなってしまうだけでなく、食物連鎖などの理由から他の動物にも影響が出てくることを覚えておかなくてはならないと思います。今一度、私たち人間に何ができるのか考え、対策を取るるべきです。